



平成14年度 野生動物保護活動助成事業

飼育下で繁殖したタンチョウを
野生復帰させるために必要な飼育技術の研究

— 抜 粋 —

釧路市動物園

〔はじめに〕

平成15年1月27日の一斉調査(北海道)では、タンチョウお生息数は908羽を数え(前年比100羽増)、うち幼鳥は115羽と順調な生息数増加をみた。また、道東以外での目撃例も増えており、生息地の拡大が推測されるが繁殖の確認には至っていない。繁殖地の環境悪化は現在も進んでおり、生息数が減少へ転じる可能性をまだ抱えている現状である。

釧路市動物園は、丹頂鶴自然公園を含めて常時45羽以上のタンチョウを飼育している。昭和33年の鶴公園開設時に捕獲した創設個体から数えて3代目・4代目が繁殖の中心となっているが、飼育スペースが限られていることから繁殖を抑制してきた経過があり、ここへ来て累代飼育に伴う新たな問題も出てきている。

釧路市動物園は、傷病・斃死個体の収容施設として、治療後の野外復帰、死因究明を行っており、また、野生個体群に異変があったときに飼育個体を野外へ放せるよう、遺伝的多様性を保ちながら自然に近い飼育を心掛けている。

飼育下繁殖個体を野外復帰させるためには、これまでの繁殖技術に加えて、復帰のための飼育技術が必要であり、本年度は次の項目について研究を行った。

(1) 昨年度に引き続き、飼育下繁殖個体及び傷病治癒個体のうち、野生復帰可能な個体

には足環を装着して放す。

(2) 有精率を上げるための一方法として、ペアリングして5年以上たつて有精卵の出な

い番いについては組換えを行う。

(3) 餌飼料の分析(Cu,Zn,Fe,Mn)を行う。

〔活動の概況〕

1. 足環の装着状況—今年度装着分

足環・ 左	足環・ 右	性別	生年	来園理 由	父	母	備 考
赤K05	—	♀	2003	繁殖	エム	タツ コ	鶴公園で飼育 中、飛去待ち

赤K06 — ? 2003 繁殖 ハチ マリ 動物園で飼育
ベエ 中、飛去待ち

青K15 未定 ♀ 2003 保護 — — 斜里町で保護

既放鳥個体の追跡については、タンチョウ保護調査連合及びオジロワシ野生復帰研究会の協力を得ているが、連絡カードを作成し市民との協力体制の形成を図る。

2. ペアの組換え

有精卵が得られない3つのペアの組換えを行った。結果としては繁殖に成功しなかったが、新たな番い構成直後に2番いで有精卵が得られたので今後に期待ができる。

3. 餌飼料の分析

当園で主に与えているトウモロコシ実粒と魚のホッケについて分析を行った。

餌飼料のマンガン濃度は、トウモロコシ実粒 ; 5.3ppm (dry base)
ホッケ* ; 6.7ppm (dry base) であった。

* : タンチョウがホッケ全体を摂取するものと仮定して、1尾全体を分析試料として測定した。

○この活動報告書には「タンチョウの肝微量元素と予測される微量元素欠乏症について」

と題する調査研究が添付されている。

以下はConclusionとして、記述されている部分である。

「近年、飛翔中に地上の構築物と衝突するタンチョウが激増していると言う。この現象の真の原因は不明である。今回、我々は、タンチョウの肝微量元素水準を測定し、特に家禽栄養学におけるManganeseの重要性から、タンチョウ肝Manganeseに注目し、分析した。他の動物種のManganese deficiencyにおける、肝Manganese水準を診断基準として準用すれば、飛翔中に事故に遭遇したタンチョウは、Manganese deficiencyに罹患していたと推定される。もちろん、タンチョウが飛翔中に、何故に地上の構築物と衝突するか、真の原因は不明である。しかし、事故に遭遇したタンチョウがManganese deficiencyに罹患していると仮定すると、理論的に結合織強度の低下、糖代謝異常があったと推定され、このことは獣医学的に十分に事故原因を説明する。タンチョウの肝貯蔵銅、及び、肝Manganese濃度が欠乏水準であったことは、タンチョウを生活圏において、摂取する餌の多様性の欠如、量的不足等々、飼料環境が極めて劣悪であったことを示唆している。また、Manganese deficiencyは、比較的、病初に繁殖障害を来すと考えられ、このことは、タンチョウの繁殖制限要因となる可能性を示唆している。」

[閉じる]